28P-am01

北里大学とアイオワ大学における国際学術交流を目的とした臨床薬学研修報告

○赤嶺 聡彦[1], 冨澤 淳[1], 小川 幸雄[1], 近藤 留美子[1], 吉山 友二[2], 厚田 幸一郎[1,2]（[1]北里大薬剤, [2]北里大薬）

【目的】北里大学薬学部は、教育・研修及び研究活動の連携などを目的として、2010 年 10 月より米国のアイオワ大学と国際学術交流協定を結んでおり、毎年双方の大学で、薬学部生の臨床薬学実地研修を行っている。今回、北里大学病院に勤務する薬剤師が国際的な視野の習得及び今後の業務拡大を目的とし、アイオワ大学薬学部での臨床薬学実地研修に初めて参加したため報告する。

【方法】研修期間は、平成 29 年 5 月 21 日から 6 月 9 日 の 3 週間であった。前半の 2 週間は薬学部 6 年生の実地研修に同行し、後半の 1 週間は個人研修として、アイオワ大学病院薬剤部で部署研修を行った。病院薬剤師による PT-INR 測定やワクチン投与の実習などの体験型研修に加え、米国の医療制度や薬学教育などの 15 の講義を受講した。病院・院外薬局見学では、テクニシャンと協働した調剤・服薬説明や注射薬混合業務の他、米国薬学部生の医師の回診同行や触診などの体験型研修を見学した。

【結果】病院薬剤師は PT-INR 測定後、事前に医師と協議された範囲内でワルファリンカリウムの用量変更の指示を出すことが可能であった。また、院外薬局薬剤師は末梢神経障害のある糖尿病患者専用の治療靴選択の支援や疾患悪化を防ぐための患者教育に取り組んでいた。学生の臨床教育では、体験型の実習を多く実践し、薬剤師のみならず医療チームで学生を教育していた。米国の医療や病院・薬局における薬剤師業務を実際の現場で学び、日本での薬剤師業務を国際的な視点から比較できた。

【考察】日本と米国の薬剤師業務を比較でき、業務拡大のために取り組むべき内容が明らかとなった。今後はプロトコールに基づく薬物治療管理の充実・拡大や患者教育の強化に取り組み、積極的に薬剤師の活動の場を広げ、患者の薬物治療に貢献する必要がある。